

# 教務だより

2010年10月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## ウィンブルドンの夢

茗溪塾塾長 宇野 雅春

9月のとある休日、朝から雨が激しく降っていて憂鬱な始まり。かねてから約束していたと思われるテニスの試合観戦をすっかり忘れていて目を覚ます。さて、今日は何をしようかと考える間もなく、連れ出されました。応募で券が2枚当たったということで、自称50歳を過ぎてからシャラポアを目指している妻にせかされて、競技場へ。雨だから中止なのではないかという淡い期待も、屋根付きドーム型のテニスコートと聞いてあきらめました。駐車場がなかなかないのでかなり探し回ってやっと駐車出来ました。普段なら一日〇円という上限のあるはずの駐車場が、入り口に案内の女性がたっていて、本日は大イベントがありたてこむので、20分200円の「かかった時間分」全額いただきます…とのこと。ああ結構すぐ帰るのだからそれはこっちにとって好都合。これで早く帰れる！と雨の中を会場に急いだのでした。真横から左右が見える指定の席に座ったのは第一試合の途中休憩の時です。180cmはあろうと思われる顔ははっきり見えなけれど、すらりとした若い女性が最新のテニスウェアに身を包み「ヒューッ」と叫ぶと、バシッパシッとボールが右に左へと目にもとまらぬ早さで行き交います。これをテニスというのなら私が日頃やっているのはなんだろう？と思いつつながらプログラムをチェックすると、いずれも世界ランキングが10位とか20位とか…やはり世界ランキングが高い方が余裕で勝っていく。1試合目もそれに続く2試合目もそんな感じでした。だんだん分かってきたことは妻の目当ては、あこがれのシャラポアを前日破ったという「クルム伊達公子」。休憩時間に通路に設置されたテレビにうつっていたのは前日の「シャラポア戦」であることに気がつく。ただしその試合は午後5時以降となっている。とても無理無理、「駐車場代金が当たったチケット代くらいになるよ」と説得。妻も最初のちょっとだけ見て帰ろうと納得の様子。長い待ち時間の間にクルム伊達公子についていろいろ聞かされる。今日が40才の誕生日ということ、26才で一度引退し結婚もして、37歳で再デビューしたことなど、よく知らなかった私にはびっくりすることばかり。シャラポアを破ったということも驚きでした。

そして5時になり試合は始まりました。その頃になると観客がだいぶ増えてきました…。対するはハンチェコバ、すらりとしたスタイル…あれが人間なら私たちは何なのだろうというくらい完璧のスタイル、サイボーグといった方が良いかもしれない。それに対してクルム伊達公子は小柄、すらっとしているけれど普通です。

1セットはあっけなく2-6で敗れる。世界ランキング51位ではやはり無理なのか。負けるのを見るのも何か辛いしと思いつつ、でも帰ろうという気にはなれません。クルム伊達公子が失敗すると静かに拍手がリズムを刻んだりします。「がんばれ！」という感じに。そしてポイントすると「オオッ」とか「よし！」とか言う声が起こり始めていました。

…静まりかえる…サーブ、ぼんぼんとボールを床に打つ音…。「ヒューッ」「バシッ、バシッ」…そして歓声。2セット目にはその歓声が更に大きくなりました。理由はクルム伊達公子の返す球がラインぎりぎりに、びしばしと決まり始めたのです。粘る！粘る！「ジュース」のくり返し。そこから10ゲーム連続でクルム伊達公子が獲得、2セット6-0、3セット4-0と追い上げていきました。叫びっぱなしでその頃には声も枯れ、これは、奇跡の勝利か！…そしてハンチェコバのサーブ、1打がフォルトになった瞬間、ハンチェコバがグッと涙をこらえるようにして審判に近づいていく…何？棄権？会場はどよめきに包まれました。そしてそれはやがて大歓声に…勝利の瞬間です。インタビューからハッピーバースデーを歌う頃には、声はもう出ません。熱い感動が胸にこみ上げると同時に、何故か63才の吉田拓郎が肺がんをおして昨年リリースした「ウィンブルドンの夢」の一節が胸にこみ上げてきました。「時がどれだけいそいでも、どれほど遠く過ぎていっても、いつかまた会える場所がある、その日はきっとやってくる。」そこで私が思ったことは、何かに向けて人が動くときの初めの一歩ということ。あきらめずに37才で踏み出した一歩を考えたとき、「受験」とまたそうした「一歩」をどこかで必要とするのではないか。あきらめてはいけない。40才のクルム伊達公子が見せた1セット獲られたあとの長い長い粘り…。ちなみに駐車料金は5000円。でもこの感動はそれ以上に値する。元気をもらった…。「一歩だけ前へと踏み出すこと、そいつが本当は大変だよ」「仕方ないと思うのは今でなくていい、あきらめなんてずっと先でいい」「ウィンブルドンにも出たかったよね、ワールドカップもでたかったよね」しばらく歌が私の頭の中を巡っています。